

第1ユニット報告(1)

国際井上円了研究について

三浦 節夫

1 井上円了研究の「これまで」

「明治青年の第2世代」の代表者の一人である井上円了に関する研究は、日本社会が大転換した戦後になっても本格的な取り組みはなかった。この間に関する経過について、筆者はすでに「井上円了に関する研究史」⁽¹⁾として発表したことがある。そのため、詳細はそちらを参照していただくとして、ここでは簡潔に述べることにしたい。

円了は安政5年(1858)に生まれ、大正8年(1919)に中国・大連での講演中に倒れて客死した。関係者はその急死に驚いたが、6月6日の死去から3ヶ月後の9月4日に『井上円了先生』という追悼集を刊行した⁽²⁾。そのため、同書の多くは円了の関係者の追悼文であったが、「井上円了先生行状一斑」、「甬水井上円了先生譜略」、「井上博士著作目録」、「井上円了博士全国巡回講演統計」、「井上円了博士巡講踏跡図」という生涯と著作についてのまとめが掲載されている。これが、井上円了に関する初めての研究であった。

その後、円了が創立した東洋大学では、昭和12年(1937)に『東洋大学創立五十年史』が出版されたが、すでに時代は戦争体制にあり、そのいわゆる「時局」の観点から円了の思想が執筆されたものであり、生涯についてもとくに資料にもとづいて書かれていなかった。戦後になり、東洋大学は昭和42年(1967)に『東洋大学八十年史』を出版したが、円了の生涯と思想については五十年史の枠組みと大きく異なるものではなく、ほぼ踏襲した内容にとどまっていた。昭和31年(1955)に「学祖研究室」が設立されたが(戦時下から創立者の円了を「学祖」と呼ぶようになった)、「学祖研究室は当初は意欲的で勢いもありましたが、やがてしりすぼみになっていったというのが、当時の状況ではなかったかと思います。」「学祖研究室の時代というのは客観研究という段階ではなく、学祖への関心の種を蒔こうとしたものであったと思います。七十周年記念事業のために設立されたものですから、その中からいろいろな事業の企画は生まれたのですが、学祖に関する研究というにはほど遠かったように思います」と言われている⁽³⁾。

その他、戦後には、哲学、仏教、妖怪学の分野から専門家が部分的に取り上げる程度で、それらの記述の基礎は、大正8年の追悼集の『井上円了先生』を使ったものであった。つまり、戦後になっても、円了の客観的学術的研究は行われず、死去後に出版された『井上円了先生』が基本データになっているという状態であった。

戦後、東洋大学は戦前の文化系単科大学から複数の学部を擁する総合大学となり、創立者の建学の精神が薄れていくという状況であった⁽⁴⁾。その後、昭和42年(1967)から昭和52年(1977)までの「大学紛争」を経験した東洋大学は、その間から大学再建のために、新しい「大学のあり方」を精神的物質的にも追求しなければならないという問題意識を部分的に持つようになった。

こうした問題意識から、昭和53年(1978)に「井上円了研究会」という研究プロジェクトが設立された。この研究会は三つの部会から構成され、第1部会は仏教、インド哲学、第2部会は西洋思想、第3部会は社会学、哲学の関係者で、「井上円了研究」を取り組むことになった。研究費は大学が設立した「井上円了記念学術振興基金」から、毎年1,000万円、10年間で1億円が提供されることになった。当時の東洋大学としては破格の研究資金であった(この他に、「井上円了の書」研究グループも設立され、5冊の研究成果を発表している。また、東洋大学100年史の編纂も始められた)。

この10年間で、主に活動したのは第3部会で、高木宏夫（社会学）と飯島宗享（哲学）がリーダーとなって、基本資料の収集と公開、現地調査、個人研究、総合研究を展開した。第3部会の業績として、機関紙『井上円了研究』第1号—第6号、『井上円了研究』資料集第1冊—第3冊、『井上円了関係文献年表』、『井上円了の思想と行動』が研究成果として出版された。これによって、井上円了研究の客観的学術的基礎は形成された（第1部会から『井上円了の学理思想』、第2部会から『井上円了と西洋思想』がそれぞれ1冊出版された）。

このような成果を踏まえて、東洋大学は昭和62年（1987）に創立100周年を迎えた。その記念事業として、『井上円了の教育理念—新しい建学の精神を求めて』と『井上円了選集』第1巻—第3巻が刊行された。とくに新書版で書き下ろされた『井上円了の教育理念』は、円了の生涯と建学の歴史をまとめたもので、学内外に配布されて、新たな「井上円了像」を印象づけたと評価され、現在でも大学の新入生に配布されて、「井上円了の入門書」と位置づけられている。

その後、東洋大学は平成2年（1989）に、「井上円了研究」を恒常的機関として法人立の「井上円了記念学術センター」を設立した⁵⁾。このセンターでは、機関紙『井上円了センター年報』が刊行され、また『井上円了選集』全25巻、『東洋大学百年史』を出版した。このような研究活動により、内外から新しい「井上円了研究」が発信されるようになった（「井上円了記念学術センター」は平成26年（2014）3月で廃止され、新たに教学立の「東洋大学付属井上円了研究センター」が新設され、「井上円了研究」は継続されることになった）。

2 「井上円了研究」の「これから」

すでに述べたように、東洋大学よる客観的学術的な「井上円了研究」はすでに35年以上の歴史を持つようになった。そして、平成24年（2012）9月に、国際哲学研究センター内に、「国際井上円了学会」が設立され、「井上円了研究の国際化」が取り組まれることになった。初代会長の竹村牧男（東洋大学学長）は、「これまでの大学内の井上円了研究から国際的な井上円了研究に発展させるには、より客観的学術的な研究が求められる。その中には、批判的な「井上円了研究」も含まれるが、これらの問題提起を受け止めて、新しい国際的な「井上円了研究」を進めなければならない」と述べている。この研究の国際化はまだ始まったばかりであるが、海外研究集会、学術大会、機関誌『国際井上円了研究』の刊行を柱とした活動が行われている。すでに、中国の王青、台湾の佐藤将之、アメリカのGreon Kopf、William Bodiford、John Maraldo、フランスのFrédéric Girard、Eddy Dufourmont、メキシコのAgustin Jacinto Zavala、ドイツのRainer Schulzerなどの研究発表があり、新たな研究視点が提起されるようになった。今後もグローバルな視点から「井上円了研究」がなされることになるであろう。東洋大学内の井上円了研究センターの活動とこの「国際井上円了学会」の活動が両輪となって、世界的に広がっていくことが期待されている。

註

- 1 拙稿「井上円了に関する研究史」（『国際哲学研究』1号、2012年）95-99頁。
- 2 『井上円了先生』東洋大学校友会、大正8年9月。
- 3 天野才八「学祖研究室について」（『井上円了研究』第7号、1997年）153-159頁。
- 4 拙稿「東洋大学における「建学の精神」継承の問題点」（『井上円了の思想と行動』東洋大学、1987年）193-238頁。
- 5 拙稿「東洋大学井上円了記念学術センター」（全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』、2005年）参照。